

<研究報告>

## 「不思議の国のアリス」のチェシャ猫と「黒猫」の黒猫の比較研究

金子史彦 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：ルイス・キャロル，エドガー・アラン・ポー，科学，超常現象，因果律

### 1. はじめに

本稿ではルイス・キャロル (Lewis Carrol) の「不思議の国のアリス」 (“Alice’s Adventures in Wonderland”，以下「アリス」と表記する) に登場するチェシャ猫 (the Cheshire-Cat) とエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) の「黒猫」 “The Black Cat” に登場する黒猫たちの比較研究を行いたいと思う。通常感覚であればこの両者を比較しようなどと思ひもよらないであろう。両者とも 19 世紀半ばの英米文学作品に登場する猫という共通点はあるものの、チェシャ猫が愛らしくコミカルなイメージで捉えられているのに対し、「黒猫」の黒猫たちは不気味で底知れぬ恐ろしさを以て捉えられているからである。それでは何故私がこの両者の比較研究を行おうという気になったのかというと、ある 2 つの先行研究に出会ったからである。

1 つ目は高橋康也の『ノンセンス大全』である。高橋は最初「ノンセンスと猫はウマが合うらしい」(187) と言い、猫がノンセンスを象徴するような役割を果たしているマザー・グース (Mother Goose) の唄等を紹介して、

猫にしても同様。ヘカテ，サタン，イシス，魔女に連なるその魔術＝反抗＝倨傲の暗示性は、ポウとボードレールの呪われた近代的感性によって、みごとな詩的シンボルへと精練されるのであるが、われらのノンセンス猫にそのような暗い魔性を読み込むことは不可能である (高橋, p. 189)

と述べるのであるが、チェシャ猫について論じた後で、以下のように全く正反対の結論にたどり着いているのだ。

この国を支配する狂気の偏在を宣告したのは彼だったのである。知性の権化がそのまま狂気の化身であるとしたら、これはいささかポウじみてくる。キャロルとポウは、同時代人として、案外無縁でない地点にまで自己を掘りさげていたのかもしれないのだ (高橋, p. 193)

「黒猫」にこそ言及していないものの、高橋はキャロル、そしてチェシャ猫とポーの近似性の可能性を仄めかしているのである。

2 つ目は浜野志保の「チェシャ猫と不可視のワンダーランド」である。浜野は「アリス」が書かれたのと同じ頃に生化学者ルイ・パスツール (Louis Pasteur) による伝染病の原因となる微生物の発見、万国電信連合 (Union internationale du telegraphe) の設立、物理学者ジェ

イムズ・クラーク・マクスウェル (James Clerk Maxwell) による電磁波の存在の理論的証明といった出来事があったことに言及した後で以下のように述べている。

微生物と、電信と、電磁気。『不思議の国のアリス』刊行と同時期に起きた、一見バラバラに見える三つの出来事に共通するのは、すべて肉眼では見ることのできないものを扱っているという点である。ヴィクトリア朝時代 (1834-1901) のほぼ折り返し地点にあたるこの時期、科学の熱い眼差しは、不可視の世界へと向けられていた。(浜野, p. 269)

そしてさらに、そのような時代の空気をチェシャ猫が体現しているとしている。

自由自在に出現 (appear) したり消失 (disappear) したりすることで、チェシャ猫は可視と不可視の世界を行き来する。見えていなかったチェシャ猫の姿が現れ、アリスにとって会話可能な相手になることは、肉眼では見ることのできない世界が、科学や技術によって可視化されることで、私たちにとっても理解可能なものとなることに似ている。(浜野, p. 270)

さらに浜野はこの時代には科学だけでなく、まさしく不可視なものを対象とする心霊主義、つまりスピリチュアリズム (spiritualism) も発達してきた時期だと指摘し、それと「アリス」の関連性について論じている。少なくとも 1882 年に心霊研究協会 (SPR) が設立されルイス・キャロルがその初期から終生メンバーだったのは事実である。浜野は「アリス」の「女王様のクローケー場」 (“The Queen’s Croquet Ground”) の章にジョン・テニエル (John Tenniel) によって描かれた有名なチェシャ猫の首だけが宙に浮かぶ挿絵と、ある心霊写真の類似性を以下のように指摘している。

それは、二十世紀初頭に活動していたイギリスの心霊写真家エイダ・エマ・ディーンによって撮影された心霊写真である。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて大量に撮影された心霊写真には、さまざまな様式が存在しているが、ディーンが得意としていたのは、チェシャ猫と同じように、幽霊の首から上だけが宙に浮いている写真だった。(浜野, p. 273)

これらの先行研究から判断して、一見愛らしくコミカルに見えるチェシャ猫も、実はポーの黒猫たちと同じように得体のしれない恐ろしさを秘めた不気味な存在と解釈することが出来る可能性があると考えられる。逆にポーの黒猫たちも実は一般的なイメージとは違うのかもしれない。しかし同じように謎めいた猫だとしたら何故こうも異なったイメージを一般に持たれているのか。そういった事を解明するためにも、この猫たちは比較研究をする価値があると考えられる。それらを比較研究することによって、それぞれを単独に研究しているだけでは見えてこないこの猫たちの一面を解読するのが本稿の目的である。

## 2. チェシャ猫と心霊現象

浜野はチェシャ猫と心霊現象との関わりについて、さらに物化現象についても述べている:

## チェシャ猫と黒猫の比較研究

チェシャ猫の斬首をめぐって、首切り役人・王・おきさきという三者の意見は対立する訳だが、少なくとも首切り役人と王様は、目に見えている猫の頭に関しては、物理的な実体を持つものとして扱っている。何もない空中に突然現れ、煙のように消えていくものであっても、ファンタスマゴリアの映像とは異なり、確かにそこに存在している。このようなチェシャ猫の存在様態は、本来は霊的な存在であるはずの幽霊が、物理的な実体を伴った姿で交霊会に現れる「物質化現象 (materialization)」と似ている。(浜野, p. 274)

首切り役人 (the executioner) ・王様 (the King) ・女王様 (the Queen) だけでなくアリス (Alice) もチェシャ猫を物理的な実体を持つものとして扱っている。先ずチェシャ猫が木の枝の上に座っているのを見たアリスはその歯と長い爪に少なからず恐怖を感じたのである: “The Cat only grinned when it saw Alice. It looked good-natured, she thought: still it had *very* long claws and a great many teeth, so she felt that it ought to be treated with respect.” (Carroll, p. 49) 。物理的な実体を持たない相手と捉えているならそのようなことになるはずがなかろう。そして浜野の述べている場面、チェシャ猫の首だけが空中に現れた時も、アリスは“‘It’s no use speaking to it,’ she thought, ‘till its ears have come, or at least one of them.’” (Carroll, p. 68) と、聴く物理的な器官である耳が現れるまで話しかけなかったのである。そしてチェシャ猫自身、アリス達の考えを裏付けるかのように自分の口が現れると同時に話し始めたのである: “‘How are you getting on?’ said the Cat, as soon as there was mouth enough for it to speak with.” (Carroll, p. 68) 。それではチェシャ猫は本当に実体を持った存在であったと結論付けていいのであろうか。

チェシャ猫は前述の二場面以外にも公爵夫人 (the Duchess) の家とつごう三度登場しているが、一度も他の登場キャラクターに物理的に触れたり、それがいたはずの場所に跡が残っていたりといった、物理的実体の存在の証拠が描写されてないのである。上で見た口や耳の問題も、口に関してはチェシャ猫の意図でどうにでもなる（口が現れなくても話すことは可能なのだが、敢えて話さない。自由自在に姿を現したり消えたりするチェシャ猫にとってそれぐらい朝飯前であろう）ことであるし、耳に関してはアリスの考えに過ぎない。むしろ胡椒が立ち込める公爵夫人の家で皆がくしゃみをしている中、胡椒を大量に使う張本人である故に免疫もあるとも考えられる料理番 (the cook) 以外に唯一くしゃみをしていなかったという事実:

There was certainly too much of it in the *air*. Even the Duchess sneezed occasionally; and as for the baby, it was sneezing and howling alternately without a moment’s pause. The only two creatures in the kitchen, that did *not* sneeze, were the cook, and a large cat, which was lying on the hearth and grinning from ear to ear. (Carroll, p. 44)

などは、実体が無いことを表していると解釈することも不可能ではない。

結局のところ、チェシャ猫に実体があるのかどうかは不明なままである。確かなことは、アリス、首切り役人、王様、女王様達が、それは物理的な実体を持った存在と考えている

ということである。そして浜野はそれを作品が書かれた時期の英国における、交霊会での物質化現象の流行に結び付けているわけである。霊媒 (medium) が霊を召喚して同一化し、それを通じて出席者が死者と交信するのが交霊会 (séance) である。交霊の中でも物質化現象を得意とした代表的な霊媒がフローレンス・クック (Florence Cook) であるとジャネット・オッペンハイム (Janet Oppenheim) は述べる:

彼女の全体物質化現象がロンドン中の、そして海外に至るまでの心霊主義者サークルの話題の中心となっていたとき、クックはまだ青年期にあった.... 彼女の肉体化守護霊、スピリット・ガイドの“ケイティー・キング”は、すぐさまヴィクトリア時代の心霊主義者の家庭でお馴染みの名前となった。(オッペンハイム, p. 36)

さらにオッペンハイムによれば:

驚くべきことに、ケイティーは隠れ場所から姿を現わし、気やすく参会者の間に入ってくるがあった。これは、いっそうの感銘を与えた。クルックスは全体物質化現象を長期間にわたって調査し、この魅力的な霊と腕を組んで歩くという榮譽に浴したこともある。彼女はたしかに物質的肉体を持っているようだった。(オッペンハイム, p. 37)

クックの物質化現象は色々とインチキを疑われ、未だにその真偽の結論は出ていないが、それを論ずるのが本稿の目的ではないので深入りは避ける。大切なことは「アリス」が書かれた頃に物質化現象が心霊主義の一環として英国で流行していたということである。そして既に見たように浜野がそれをチェシャ猫に対する首切り役人、王様、女王様の考えに反映されているとしていることである。

しかし首切り役人、王様、女王様たちのチェシャ猫に対する考えは、本当に心霊主義の物質化現象を反映しているのであろうか。既に見たように交霊とは霊、つまり死者との交信であり、物化現象はそれに物理的実体が伴ったものである。しかしチェシャ猫が過去に死んだということを表す描写は作品内には全く無い。自由自在に姿を現したり消したり、首だけで宙に浮いた状態でも普通に活動できるといった得体のしれない行動から、まるで幽霊のようだ、と思う人がいるかもしれないが、そもそもチェシャ猫の存在しているのは“不思議の国”であり、様々な不思議なことが起こっているのである。動物やランプが会話をしたり人間のように行動したりするのはさておいても、アリス自身の体が何度も大きくなったり小さくなったり、アリスがウサギの穴を落ちた挙句にたどり着いたのはただの広間だったはずなのにいつの間にか森やウサギや公爵夫人の家が存在していたりと、挙げればきりが無い。

しかしこの不思議な事が不思議でない世界においてすら、チェシャ猫は不思議な存在なのである。それ故、アリスと違って元からこの世界の住人である首切り役人、王様、女王様等もその首を斬ることが可能か否かを巡って意見が分かれるのであろう。ここまで私はチェシャ猫と心霊現象の結びつきに疑問を呈して論じてきたが、しかし心霊現象であるという決定的な証拠が無い反面、心霊現象ではないという決定的な証拠も無い。結局謎につ

つまれたままである。チェシヤ猫は得体のしれない不気味な存在であるのである。

### 3. 黒猫を巡る超常現象と科学の相克

チェシヤ猫と対照的に、「黒猫」の黒猫たちには多くの読者が心霊現象的なものを結び付け、得体のしれない不気味さを感じるであろう。チェシヤ猫と異なり、一匹目の黒猫であるプルートオ (Pluto) と二匹目の黒猫が物理的に存在していることは明白である。しかしそれ以外は彼等の存在は謎で満ちあふれている。主人公兼語り手の“私” (I) がプルートオを惨殺した日の晩に起こった火事で彼の家は焼け落ちたのだが焼け残った仕切り壁に殺された猫の姿が浮かび上がっていたのは何故か、プルートオと二匹目の黒猫の関係は一体どうなっているのか、二匹目の黒猫の胸にあった白い斑点の形が徐々に変化して絞首台の形になったのは何故か、二匹目の黒猫は壁の中に四日間塗り込められた状態でどうして生存することが出来ていたのか、等々。挙げた中で最初の謎については“私”もなんとか“科学的に”解明し自分を納得させようとしている:

When I first beheld this apparition—for I could scarcely regard it as less—my wonder and my terror were extreme. But at length reflection came to my aid. The cat, I remembered, had been hung in a garden adjacent to the house. Upon the alarm of fire, this garden had been immediately filled by the crowd—by some one of whom the animal must have been cut from the tree and thrown, through an open window, into my chamber. This had probably been done with the view of arousing me from sleep. The falling of other walls had compressed the victim of my cruelty into the substance of the freshly-spread plaster; the lime of which, with the flames, and the ammonia from the carcass, had then accomplished the portraiture as I saw it. (Poe, pp. 7-8)

この“私”の試みは、吉村正和の次の説明と符合すると思われる:「近代における心霊現象へのアプローチの仕方を決定づけているのは、超自然的な現象を科学的に説明しようとする脅迫観念である」(吉村, p. 172)。しかしこれ以降、“私”は超常現象を科学的に解明しようとすることをしなくなった。プルートオに似た片目の猫が異様に彼になつてきてもそれがプルートオの憑依のようなものではないということを証明しようとせずただ怒りを募らせるだけであったし、その猫の首の白い斑点が絞首台、そうかつて彼がプルートオを木に首吊りにして殺害したことを思い出させる絞首台の形になっても怯えるだけであった。二匹目の黒猫が壁に塗り込められた状態で四日間生存していたことに関しては直接なんの疑問も呈していない。少なくとも描かれてはいない。彼は超常現象に科学が負けたと観念したのであろうか。

ここに注目すべき“私”の言葉が冒頭にある:

In their consequences, these events have terrified—have tortured—have destroyed me. Yet I will not attempt to expound them. To me, they have presented little but Horror—to many they will seem less terrible than *barroques*. Hereafter, perhaps, some intellect may be found

which will reduce my phantasm to the common-place—some intellect more calm, more logical, and more far less excitable than my own, which will perceive, in the circumstances I detail with awe, nothing more than an ordinary succession of very natural causes and effects.

(Poe, p. 1)

特に注目すべきは引用の最後にある“cause and effects”という言葉である。そもそも“私”はブルートオを惨殺した日の晩に火事が起きたことに関してもその言葉を使っている: “I am above the weakness of seeking to establish a sequence of cause and effect, between the disaster and the atrocity. But I am detailing a chain of facts—and wish not to leave even a possible link imperfect.” (Poe, pp. 6-7)。ここで“私”は己の残虐行為、つまり猫殺しと惨事、つまり火事との間に“cause and effects”を探そうとする弱い人間ではないと言っているものの、実際には上で見た様に結果の原因をなんとか探して己を納得させることに必死になっている。それから考えると、弱い人間ではない云々は彼の強がりであり、実際には“cause and effects”の概念を否定されることへの恐怖の裏返しと解釈できる。原因と結果の結びつき、つまり因果律が成り立っていることが科学的と呼べるものであり、堀伸夫も「まず最初にはっきり言って置かなければならないことは、科学とは物質現象の因果関係を追求するものだということである」(堀, p. 143)と述べている。またパトリシア・S・ウォリック (Patricia S. Warrick) も「ニュートンの考え方は、あらゆるものを原因と結果のメカニズムとして説明するもの」(ウォリック, p. 141)であり、そこから「科学においては、つねに原因と結果というメカニズムが働いている」(ウォリック, p. 141)という科学的な考えが始まったと述べている。つまり“私”は奇怪な事象を因果律を追求することで解明しようとする科学的な人間だったのである。既に述べたように途中からは科学的な解明を諦めてしまったようにみえる“私”であるが、そこで注目すべきが上に引用した話の冒頭の彼の言葉である。“私”にとっては幻想としか思わざるを得ない奇怪な一連の事象に因果律を見つけ合理的に説明できる知的な人が今後現れるかもしれない、と述べているわけである。これについても堀の以下の言説と呼応する部分がある。

科学の問題の中には既得の法則で説明できないような問題が無数にある。それゆえにこそ科学は日々進歩しているのである。従って科学者は誰でも、今日までに発見せられた科学の法則では説明できないが、将来いつかは説明できるであろうと信じている。現在は説明できないが将来は科学によって説明し得る可能性があると思われたい範囲の事象を仮に問題的事象と名づけるならば、科学者はこのような問題的事象の存在を否定しないことは言うまでもない。(堀, p. 21)

つまり現時点では科学では説明不可能だが、より科学が発達した将来なら可能になるという信念を科学者は持っているという点である。もちろん“私”は科学者と呼べる代物ではないし、将来自分の経験した奇怪な事象が説明できると信じているというほどではない。しかしその可能性・希望は捨てきっておらず、その点で彼は最期まで科学の世界の人間であり、心霊現象のような超常現象を認めたわけではないということが言える。

読者の多くは二匹目の黒猫はプルートオが復讐のために他の黒猫に憑依したもの、あるいはプルートオの幽霊のような心霊的存在ではないかと感じるであろう。プルートオの霊の物質化現象の結果が二匹目の黒猫とも考え得る。しかし“私”同様科学的に解明することは不可能なままである。チェシヤ猫同様黒猫たちの謎は解明されないまま終わっており、それらも得体の知れない存在であり続けるのである。

#### 4. 超常現象に対するアリスと“私”の態度の相違

チェシヤ猫、「黒猫」の黒猫たちともにその存在の謎が最後まで解明されないまま終わっており、その謎というのも心霊現象のようなものと深く関わっている可能性があることがわかった。しかし1章の冒頭で述べたように、なぜ一般的に両者は全く異なったイメージで捉えられているのであろうか。勿論第一に考えられるのは、チェシヤ猫が無害な存在なのに対して黒猫たちは結果的にとはいえ“私”を絞首台送りにしているからということであろう。しかし黒猫たちは一匹目（プルートオ）を惨殺した“私”に復讐として絞首台送りにしただけである。“私”が恐ろしいというのならわかるが、単に復讐をしたというだけの理由で黒猫たちに普通そういう感情を抱かないであろう。例えば『かちかち山』のうさぎや『ハムレット』(Hamlet)のハムレット(Hamlet)を不気味に感じたり恐ろしく思ったりするだろうか。

そこで考えるのは、猫たち自身でなく彼等を解釈する側の人間の考え方の相違である。「黒猫」の“私”が最期まで科学の側の人間であり、黒猫たちに関する超常現象が科学的に解明されるのを望んでいたのは前章で見た。それはやはりこの“普通の”世界で超常現象らしきことが起これば多くの人間が示す反応であろう。一方チェシヤ猫のいるのは不思議の国である。アリスも最初はこの普通の世界ではあり得ないようなことに戸惑っていたのだが直ぐに適応した:

She ate a little bit, and said anxiously to herself “Which way? Which way?” holding her hand on the top of her head to feel which way it was growing; and she was quite surprised to find that she remained the same size. To be sure, this is what generally happens when one eats cake; but Alice had got so much into the way of expecting nothing but out-of-the-way things to happen, that it seemed quite dull and stupid for life to go on in the common way.  
(Carroll, p. 7)

適応したとは言っても、アリスは完全に今までの自分の世界の“常識”を捨てて不思議の国の住人と同じ感覚になったわけではない。例えば体が小さくなっている時に白うさぎ (the White Rabbit) に召使いのメアリー・アン (Mary Ann) と間違えられて命令をされた時 “How queer it seems,” Alice said to herself, “to be going message for a rabbit! I suppose Dinah’ll be sending me on message next!” (Carroll, p. 25) と当惑したり、公爵夫人の家で初めてチェシヤ猫を目にしたときそれがにやにや笑っているのに驚き、公爵夫人に尋ねる:

“Please would you tell me,” said Alice, a little timidly, for she was not quite sure whether it

was good manners for her to speak first, “why your cat grins like that?”

“It’s a Cheshire-Cat,” said the Duchess, “and that’s why, Pig!”

She said the last word with such sudden violence that Alice quite jumped; but she saw in another moment that it was addressed to the baby, and not to her, so she took courage, and went on again:

“I didn’t know that Cheshire-Cats always grinned; in fact, I didn’t know that cats *could* grin.”

“They all can,” said Duchess; “and most of ’em do.”

“I don’t know of any that do,” Alice said very politely, feeling quite pleased to have got into a conversation.

“You don’t know much,” said the Duchess; “and that’s a fact.” (Carroll, pp. 44-45)

アリスは相変わらず自分の世界で持っていた“常識”を持ち続け、それで不思議の国で起こる超常現象に対応したりもしているのである。そしてその“常識”の中には科学的知識も含まれており、むしろそれをひけらかしたがつている:

“If everybody minded their own business,” the Duchess said, in a hoarse growl, “the world would go round a deal faster than it does.”

“Which would *not* be an advantage,” said Alice, who felt very glad to get an opportunity of showing off a little of her knowledge. “Just think what work it would make with the day and night! You see the earth takes twenty-four hours to turn round of its axis—” (Carroll, p. 46)

つまりアリスも“私”同様この世の常識、科学的知識すら放棄したわけではないのである。では両者のそれらに関する違いは何であろうか。それは“私”が科学的知識をもって超常現象を合理的に説明しようとする、あるいは説明されることを望み続けているのに対し、アリスはこの世の常識、科学の観点から超常現象に驚いたりすることはあっても、それを科学的知識をもって合理的に説明しようとはしないという点である。結局アリスは超常現象に驚いても、それを事実としてありのまま受け入れているのである。であるからチェシャ猫がにやにや笑うこと、ましてにやにやや笑いを残してチェシャ猫の実体が消えるなどということにひどく驚いても: “Well! I’ve often seen a cat without a grin,” thought Alice; “but a grin without a cat! It’s the most curious thing I ever saw in all my life!” (Carroll, p. 51) というだけでそれ以上の詮索をしようとしたら悩んだり怖がったりせず、チェシャ猫の存在を受け入れ、友達にさえなるのであった: “It’s a friend of mine—a Cheshire-Cat,” said Alice: “allow me to introduce it.” (Carroll, p. 68)。不可解なものは不可解なものとして好意的に受け入れるアリスと、超常現象を受け入れられず最期まで科学の立場からの闘いを諦めない“私”、この両者の好対照な態度によって、同じく得体のしれないままの謎めいた猫であってもチェシャ猫と黒猫たちは全く異なったイメージを持たれているのであろう。

## 5. ストーリー自体の構造の相違

さらにもう一つ考えられる理由がある。それはストーリーの構造の相違である。「アリス」



は最後にアリスが目を覚まし、不思議の国自体がアリスが眠っている間に見た夢に過ぎなかったという、いわゆる夢落ちとなっている:

“Wake up, Alice dear!” said her sister. “Why, what a long sleep you’ve had!”

“Oh, I’ve had such a curious dream!” said Alice. And she told her sister, as well as she could remember them, all these strange Adventures of hers that you have just been readings about; and, when she had finished, her sister kissed her, and said, “It was a curious dream, dear, certainly; but now run in to your tea: it’s getting late.” So Alice got up and ran off, thinking while she ran, as well she might, what a wonderful dream it had been. (Carroll, p. 102)

不思議の国の住人である白うさぎを冒頭でアリスは眠りに落ちる前に見ており地上のこの世で白うさぎを追いかけしているのではないかという指摘も考えられるが、その時点でアリスは既に眠っていたと解釈できる描写もある(アリスは非常に *sleepy* であったという):

So she was considering, in her own mind (as well as she could, for the hot day made her feel very sleepy and stupid), whether the pleasure of making a daisy-chain would be worth the trouble of getting up and picking the daisies, when suddenly a White Rabbit with pink eyes ran close by her.” (Carroll, p. 1)

つまり不思議の国でアリスが見たり経験したりした超常現象はすべて彼女の夢の中にしか存在しない架空のものであり、チェシャ猫もその例に漏れないと解釈することも可能なのである。そうすればチェシャ猫がいかにも謎めいた得体のしれない存在であろうとも不気味さはなくなる。「アリス」は科学で全てが合理的に説明ができる一貫性のある現実世界であり、そこで夢を見た少女を描いたものとして片づけることが可能である。

一方「黒猫」にはそういったものがない。様々な超常現象は合理的な説明がなされないまま言わばオープンエンドで終わっている。超常現象と思われるものが、実際に超常現象だとはっきりしているのなら、この作品世界は超常現象が起きる科学万能ではない世界なのだとはそれはそれで一貫性を見出せるのだが、そうしてもいけない。3-4章で論じたように“私”の態度、科学によって超常現象が合理的に説明される希望を持ち続けていることがそれを強調させている。よって「黒猫」は、さらにはその登場キャラクターである黒猫たちは謎めいた得体のしれないままなのであり、不気味さが拭い去れないのである。

両作品とも19世紀の半ばに書かれたわけであるが、19世紀の科学についてウォリックは次のように述べる: “十九世紀の科学によれば、あらゆる自然現象は、盲目的な自然の諸法則に支配された基礎的単位のきまぐれな働きによるものだった。フランスの数学者ラプラスは、粒子の運動量と位置を知れば全宇宙のあらゆる状態が予測できる、そうなるのが科学者の理想だと述べている”(ウォリック, pp. 141-142)。「アリス」は、不思議な国自体が全てアリスの夢に過ぎなかった、と考えれば、作中で起こった事は全て自然の諸法則を逸脱するものではない。一方「黒猫」はそういうわけにはいかない。それにも関わらず“私”の科学的説明への果てぬ執着、言わば悪あがきを通じてその解決不可能性を強く印象付けている。チェシャ猫は夢に過ぎない自然現象と科学で説明できる可能性が残されている、一方

## 金子

黒猫たちは科学で説明できないが、そうかと言って憑依や幽霊のような心靈現象・超常現象であると結論付けることも出来ない。ストーリーの構造自体を調べ比較すると、そのような相違が見えてくるのである。

### 6. まとめ

チェシャ猫と「黒猫」の黒猫たちはともに謎めいた得体の知れない存在であり、それらの正体が何であるかは永久に解明されないであろう。つまりそれらはともに“謎めいた猫”であり続けるのである。しかし前者がコミカルな明るいイメージで捉えられ、一方後者は不気味で暗いイメージで捉えられているのは、それら自身の問題ではなく彼等を取り巻く環境、つまり論じてきたようにアリス、“私”のそれらを解釈する態度の相違、またはストーリーの構造の相違である。そのストーリーの構造の件であるが、前章では敢えてチェシャ猫を含む不思議の国全体が夢であったという立場で論じたが、少し触れたように、アリスの夢がいつから始まったのか、という問題が残っている。白うさぎを見た時点で既に眠っていたという解釈は、そういう解釈も出来るという一つの選択肢に過ぎないのであり、つまるところ不思議の国全てがアリスの夢に過ぎなかったというのは確たる証拠は無いのである。しかし一般的にはこの解釈で「アリス」は読まれているであろう。そしてそれがチェシャ猫のイメージにも大きく寄与している。結局のところチェシャ猫も黒猫たちも同類、得体の知れない謎めいた猫なのだ。両者の捉えられているイメージの相違は、前者にはその謎を科学的に解明することが可能な選択肢が与えられており後者はその解明不可能な謎が前景化されていること、そしてその謎に対する主人公の態度の相違に起因しているのである。

## 文献

- Carroll, Lewis. “Alice’s Adventures in Wonderland.” In *Alice’s Adventures in Wonderland & Through the Looking-Glass*. New York: Bantam, 2006, pp. 1-104.
- Poe, Edgar Allan. “The Black Cat.” In *The Black Cat and Other tales*. 渡部昌編, 東京: 南雲堂, 1979, pp. 1-18.
- ウォリック, パトリシア・S 『サイバネティック SFの誕生——ギリシャ神話から人工知能まで』 斉藤健一訳, 徳島: 株式会社ジャストシステム, 1995.
- オッペンハイム, ジャネット 『英国心靈主義の拾頭』 和田芳久訳, 東京: 工作舎, 1992.
- 高橋康也 『ノンセンス大全』 東京: 晶文社, 1989.
- 浜野志保 「チェシャ猫と不可視のワンダーランド」 『150年目の不思議の国のアリス』 高山宏・西館一郎編, 東京: 青土社, 2015, pp. 268-277.
- 堀信夫 『科学と宗教—神秘主義の科学的背景』 東京: 槇書店, 1984.
- 吉村正和 『心靈の文化史—スピリチュアルな英国近代』 東京: 河出書房新社, 2010.

(2017年 5月31日 受付)  
(2017年 7月 7日 受理)